

No.1 リチャード・ウィルソン —無題—

Richard・Wilson

北川フラムさんのコラム / 1996 (平成8) 年 3月 1日付 立川市市報記事より

天に昇るような階段が、歩行者専用道路といわれている広場に金属の光を放ってそびえている。しかし、この階段は地下の大きな機械室へと降りる共同溝の階段の入り口だ。その上、機械室のためのメーターが組み込まれ、排気のためのルーバーまでついている。

リチャード・ウィルソンのこの作品は、機能あるものをアート化しようというファーレ立川でのアート設置の考え方を、見事に造形化したものだ。新鮮で切れ味のある作品は街を生きいきとさせている。リチャード・ウィルソンの仕事はある空間を思いもかけない世界に変えてしまう、新しいタイプの作家だといえるだろう。彼は美術をやる前は音楽家としてドラムをたたいていたという。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

1993 年末に私は北川フラムさんから立川の都市計画に参加するよう要請されました。その要請とは、立川の特定の場所に彫刻を制作するという事でした。1993 年 11 月末に現場見学をし、現場と模型を見、その地域の写真と図面を集めました。

簡単な準備ではありませんでした。彫刻の設置場所は実は職工人が地下にある設備のメンテナンスをするための出入り口でした。簡単に言うとそれはドアまで下りていくコンクリートの階段が付いた 4m×1mの穴です。依頼されたのは風雨を遮る囲みがあり、鍵をかけることができる、さらに特定の交換グリルが付いた彫刻でした。模型を幾度も起こし試した後、提案は了承され、現在日本で制作を始めています。

最終的アイデアは、この囲みが囲んでいるものを露わにするというものです。下に降りる階段を隠すよりも、そこにあるものを見せるため、彫刻は軸柱、バラスト、手すりが地面から空中に上る典型的な英国式階段となりました。しかし、普通の階段よりもはるかにスケールの大きなものとししました。そうすると周りの空間に対しても大きく見えるようになり、大きければ大きいほど堂々とした感じが出ます。これは実用レベルでは、普通の大きさの本物の階段ではないこの階段を一般の人が上ることを防ぐ手だてとなっています。